「予科練」第468号　令和4年1月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

豫科練

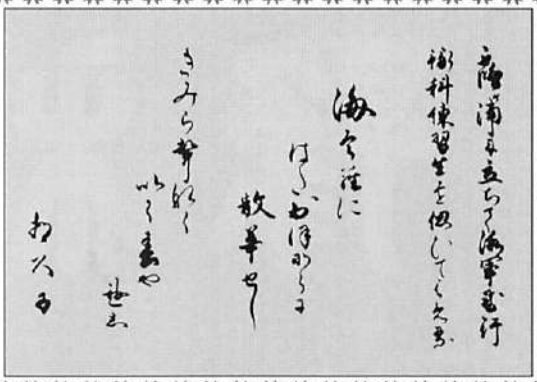
No.468　令和4年

1・2月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.10… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○名刺広告…… 4
○甲飛三期、児玉清三兵曹と岸田清次郎兵曹…… 6
○豫科練の戦争　翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑦…… 11
○さらば予科練②…… 12
○天国へのメッセージ②…… 17
○事務局を移転しました…… 17
○三四三空隊史⑩…… 19
○寄付者芳名簿…… 23
○事務局日誌…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　百里原空碑　No.10

百里原空は筑波空の分遣隊として、昭和13年に開隊したが、搭乗員の急速増員を図る為に、昭和14年12月1日に谷田部空と共に陸上機操縦教程の練習航空隊であった。

昭和18年の後半になってから、戦局は急迫を告げるに至り、第一線航空隊の要員を大量かつ急速に養成するに迫られ、現在の練習航空隊だけでは養成し切れなくなったため、新たに中練教程の練習航空隊が続々開隊することとなった。以後特攻隊編成への移行が始まり、菊水第一号作戦の第一陣として第一正統隊が突入したのを皮切りに次々と沖縄に対する特攻作戦が行われ、当百里原空からも九州の基地を経由して特攻機が出撃していった。

これらを記念して昭和51年3月に、関係者の手によってこの記念碑が建立されたのである。

碑建立は　昭和五十一年三月

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

遺詠

神風特別攻撃隊第二御楯隊
六〇一空所属
海軍上等飛行兵曹
牧　光廣
二十歳
広島県

第十六期乙種飛行予科練習生

いざ征かん
明日は御空の特攻隊
むすぶ今宵の
夢はふるさと

昭和二十年二月二十一日彗星艦爆に爆装50#を抱き、八丈島基地を発進して硫黄島周辺海域の敵艦船群攻撃中に戦死する。

遺詠

震洋特別攻撃隊
第十二松枝部隊所属
海軍二等飛行兵曹
大和昭吾
十九歳
栃木県

第二十期乙種飛行予科練習生

若き身に
尊き任務頂きて
散りにしときぞ
心安けれ

昭和二十年二月二十五日、コレヒドール島防衛中に、上陸の米軍と地上戦闘中戦死する。

謹賀新年

新年のご挨拶

新春を迎え海原会の皆様には、益々お健やかにお過ごしの事と心より慶祝申しあげます。

昨年は新型ウイルス禍のために、予科練戦没者慰霊祭が一昨年に引き続き、一部関係者のみによる祭祀とならざるを得ませんでした。本年は第五十五回の節目の慰霊祭を迎えます。会員の皆様にはお揃いにて聖地雄翔園に集い、無事に斎行出来ますことを祈念しております。

さて、海原会は、その運営の拠点として長い歴史を刻んで参りました東京大森事務所を、昨年十一月に予科練の聖地雄翔園が所在する茨城県阿見町に移転いたしました。今後は地元の皆様に倍旧のご理解を賜わり海原会の更なる発展を図りたいと考えております。

終わりになりますが、雄翔園開設以来、日夜当園をお護りいただいております「自衛隊武器学校」の皆様に深甚なる敬意と感謝を申し上げるとともに会員の皆様の益々のご多幸をご祈念申し上げ、新年のご挨拶といたします。

令和四年　元旦

公益財団法人海原会　会長　小林　和夫（乙飛十九期）

公益財団法人

水交会

会長　赤星慶治
副会長　佐賀幾雄
理事長　杉本正彦
副理事長　河野克俊
専務理事　村川豊
事務局長　長谷川洋

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長　杉山蕃
理事長　藤田幸生
副理事長　岩崎茂
専務理事　石井光政

公益財団法人

海原会

理事長　菅野寛也（一般）
会長　小林和夫（乙19）
副会長　太宰信明（甲14）
副理事長　酒井省三（一般）
副理事長　安井剛（一般）
顧問　池太郎（一般）
顧問　六車昌晃（一般）
理事　平野陽一郎（一般）（事務局長）
理事　保坂俊雄（乙23）
理事　篠田輝男（一般）
理事　山下桂子（一般）
理事　湯原豊一郎（一般）（霞ヶ浦支部長）
理事　星指隆（一般）
監事　豊岡昭（甲16）
参与　行方滋子（一般）（霞ヶ浦支部副支部長）
参与　脇田四郎（甲13）

賀正

(公財)海原会・理事長 零戦愛好会・会長	菅野寛也
(公財)海原会・評議員 三重空甲十二期会・代表幹事	久保山賞一
(公財)海原会・評議員 予科練二十四期会世話人代表	岩舘芳雄
予科練特飛十期会会長	佐藤建次
(公財)海原会・監事 土空甲飛十六期	豊岡昭
(公財)海原会・理事・広報担当 予科練二十三期会・会長	保坂俊雄(23)

「人と自然が作る楽しい」茨城県稲敷郡阿見町

東洋一と言われた霞ヶ浦航空隊に、若き雛鷲の声がこだましました。

土浦海軍航空隊は、いま人口四万七千人の町の大きな歴史財産になっています。

阿見町は、現在福祉、緑の保全、生涯学習などに力を入れ、住民参加の町づくりを、積極的に進めています。

穏やかな霞ヶ浦、町中にあふれる桜の花が、今も静かに鎮魂の意を捧げています。

予科練の歴史を後世に奇与するため、阿見町は「霞ヶ浦平和記念公園」を整備し、平和のシンボル「予科練平和記念館」を建設し、開館しました。

平成二十二年二月一日

回天一型実物大模型　全長14.75米　直径1.0米　時速30ノット　乗員1名

「甲飛三期、児玉清三兵曹と岸田清次郎兵曹」

海原会会員
冨澤奈津子
（山形県在住）

児玉清三さんは、大正十年十一月二十五日生まれ、山形県東村山郡、旧制寒河江中学出身、艦攻偵察員。

岸田清次郎さんは、大正十一年四月二十七日生まれ、滋賀県近江八幡市、旧制膳所中学出身、艦攻偵察員。

二人は昭和十三年十月一日、横須賀航空隊に甲種予科練第三期生として入隊しました。

ところが、三期生たちは思っていた待遇とはあまりにかけ離れた状況に憤慨、クラス全体は海軍への激しいストライキへと突き進んでいきました。先輩である甲飛二期生の少数や、特に後輩となる甲飛四期生の大多数の予科練生を巻き込んでいき、そのストライキは海軍上層部でも由々しき事態であると判断されるに至るものでした。

三期生の分隊長である少佐が説得、このままでは厳罰が下ることや軍の待遇が良くなかったことなどを涙ながらに話し、それに心打たれたのか、あっけなく終息しました。

しかしながらこのまま卒業してよいのか？と考えていた甲飛三期生もおり、卒業を間近に控えたある日、

「卒業が近い。いよいよボーイズ・ビ・アキラメロだぞ。しかし近眼になれば帰れるぞ」

と同期生たちは話し合い、そこからは毎晩毛布を被り、懐中電灯の暗い灯りで、徒然草、英語のリーダー等を目が腫れるほど読み続けましたが、誰一人近眼にはならず卒業となりました。最早この時点では腹を括ったものと思います。

児玉・岸田両兵曹は、共に最初の配属から空母翔鶴の雷撃隊員として乗り組みました。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃では、児玉兵曹は四二小隊二番機、操縦大谷信治一飛、偵察大久保忠平一飛曹（甲飛一期）、電信児玉二飛曹のペアで出撃しました。大久保兵曹の手記には、緊張して固くなっている初陣の児玉兵曹の様子が残されています。

岸田兵曹はご家族に初陣の報せの手紙を書いたものの、空母翔鶴の行動調書にお名前が見当たりません。急遽、出撃が変更となったのでしょうか？

次の出撃は十二月十七日、児玉兵曹は対潜哨戒として索敵任務、真珠湾と同じペアでした。十二月二十四日、翔鶴は一度呉へと帰ってきます。

児玉兵曹は幼いころから兵隊になることを望んでおり、地元でも本名ではなく「兵隊さん」というニックネームで通っていたぐらいでした。柔道と水泳を得意とし、最上川の鉄橋から飛び込んでは兄たちをはらはらさせ、女子とは嫌でも口をきかず、寡黙であり、通学では家庭のことを考えてか一年中一里半（約六キロ）の道のりを歩いて通いました。とにかく人のマネは嫌いで、我が道を行く性格であったそうです。成績も大変優秀で、教師をなさっていた御兄様には英単語の一つも教わることなく、常に上位三～五位を占めていました。

岸田兵曹は勉強スポーツなんでもよくでき、友人たちからも好かれ、人の輪の中心のような人でした。弁論もずば抜けており、常に成績は上位。

児玉兵曹と最も違うと感じるところは、女性の友人もいたというところかもしれません（笑）

この女性は、岸田兵曹にとって大切な人であったようです。予科練を受験するときには心から応援し、帰省するときは必ず会おうと約束し、岸田兵曹が戦死した後は御両親を慰めました。

翔鶴の元運用長福地周夫大佐が書き残された、空母翔鶴海戦記や予科練物語あゝ南海の若桜、海軍くろしお物語などにも記載されていますが、岸田兵曹がこの女性のことを書き記した手紙は一切なかったようです。

軍事郵便という建前の中で結婚前の男女のことを簡単に書くことはできませんし、将来を約束した間柄ではなかったからなのかもしれません。しかし軍人である彼が、いなくなった後の彼女の人生を思いやっていたからではないかとも感じます。

福地大佐は戦後、この女性から岸田兵曹との思い出を聞いていました。激しい激情ではなくあくまでもプラトニックであり、彼自身の大切な女性を思いやる気持ちが感じ取れます。だからこそ彼女にとっては、ずっと色褪せることのない、優しく美しい思い出であったのだろうと思います。

戦いへと話を戻します。翔鶴は昭和十七年一月五日に日本を発ち、十四日にはトラック島に到着しました。

一月二十一日東部ニューギニアのマダン攻撃に出撃。操縦佐藤孝司一飛曹（甲飛二期）、偵察菅野兼蔵一飛曹、電信児玉兵曹。（四一小隊一番機）ここでも岸田兵曹の名前はでてきません。

四月五日～九日はセイロン沖海戦、九日に出撃でした。操縦戸田儀助二飛曹、偵察児玉兵曹、電信安部晃二飛曹。（甲飛四期）（四一小隊二番機）この日岸田兵曹の名前がとうとう行動調書にでてきます。操縦後藤継男一飛曹（乙飛六期）、偵察菅野兼蔵飛曹長（進級）、電信岸田一飛曹。（四二小隊二番機）

そしていよいよ珊瑚海海戦を迎えます。昭和十七年五月七日、セイロン沖海戦時と同じペアで二人ともに出撃。

索敵機から敵空母発見の報せを受け、翔鶴・瑞鶴は合わせて八十機もの艦爆、艦攻、戦闘機を出撃させました。

ところがこれは誤報であったことがわかりました。油槽艦と駆逐艦だったのです。この時、瑞鶴艦爆隊員であった甲飛三期の石塚重男一飛曹らが戦死されていますが、翔鶴・瑞鶴はほぼなんの収穫もないまま帰投せざるを得ませんでした。

しかし日米双方が近くにいる

ことだけは確実な現状です。司令官、原忠一少将は決死の思いで薄暮攻撃隊を出撃させることを決めました。

ここで選ばれた技量優秀者の一人は、翔鶴へ同時に乗り組み、ずっと共に戦ってきた同期生である高橋弘一飛曹（山形、旧鶴岡中）でした。生還は望めない厳しい任務で、征く方も見送る方も言葉がなかったそうです。同じ日に予科練に入隊し、前線で厳しい戦いに明け暮れ、共に泣き笑いした仲間を、もう戻ることは望めないとわかって見送る気持ちを、私にはすべて理解することができません。

ですが当人たちにとって、お互い同じ立場でしかなかったことだけは言えると思います。戦いに生きる男たちにとって明日は我が身でした。

翔鶴の乗組員たちは、仲間が還ってこない長い夜を過ごし、児玉・岸田兵曹は遅くまで語り合いました。

翌八日の早朝、児玉兵曹が目を覚ますと、岸田兵曹が飛行服をきて準備をしています。

「索敵にいってくるよ」

といつも通りの淡々とした姿でした。

岸田兵曹のペアである操縦後藤兵曹、偵察菅野飛曹長、電信岸田兵曹の索敵機より、〇六二二、敵機動部隊発見の報せを受け、翔鶴飛行隊は〇七〇〇、出撃を開始。児玉兵曹のペアは、操縦戸田兵曹、偵察児玉兵曹、電信安部兵曹。（四二小隊二番機）

この日菅野機は、敵との触接をしながら次々に動きを知らせました。母艦へ帰投するための燃料が少なくなったため、帰投する旨を打電し母艦へと向かっていた矢先、遠くの空に仲間たちが攻撃のため飛行する姿が見えました。自分たちが知らせた敵機動部隊の位置です。自分たちが一番わかっていました。

菅野機長はすぐさま帰投を止め、仲間を誘導することを母艦へ知らせます。それはこの索敵機三人の死を意味しました。残りのガソリンは、帰るためのギリギリしかありません。

索敵機の搭乗員たちにとって、敵を見つけその位置を知らせること、それが何よりもの任務であり、それができれば勲章ものなのです。例え命を散らしても、敵の位置を味方に知らせるまでは死ねない、そのあとはもうどうにでもなれ！といった心持ちなのだそうです。今を生きる私にはとても理解できない心持ちですが、それほどに敵を見つけ、正確な位置を知らせるということが、当時の海戦には大変重要な任務でした。

菅野機の命がけの索敵と誘導により、仲間たちは敵空母レキシントンを撃沈せしめ、空母対空母という大きな海戦を戦い抜いたのです。その引き換えとして、岸田兵曹たちは還ってくることはありませんでした。

翔鶴の運用長であった福地大佐にとって、菅野飛曹長は特別な部下でした。翔鶴での初任准士官教育主任としての教え子だったのです。そのため自らの命を顧みずに戦ったこの姿を、何としても国民に知ってもらいたいと行動を起こしました。国民へ向けたラジオで「帰らぬ索敵機」として放送したのです。

この時、機長である菅野飛曹長のお名前がでたものの、後藤兵曹、岸田兵曹のお名前がでることがなく、御遺族が知ることはありませんでした。

しかしその後御両親は、愛する息子があの索敵機の搭乗員として勇敢に戦ったことを知ったのです。

岸田兵曹の御父様は常に御子息へ言い聞かせていた言葉がありました。

「血気にはやり命を粗末にしてはならぬ。しかし、なにか大きなものと取り替えるときがあったならば、生命を捨てるのに躊躇してはならぬ。」

それを身を挺して息子は守りぬいたのです。

御子息の戦死の報せは児玉兵曹からの手紙で知りました。立派な最期であったと記されていました。泣かぬわけはないご子息の戦死でしたが、息子と共に必死に戦った仲間が今も生きて戦っている、このことが御両親にとってはせめてもの慰めであったように思われます。

珊瑚海海戦で翔鶴は大破し、

戦うことが不可能となりました。その後呉へと戻り六月、七月は修理期間となったのです。

その間、大規模な乗組員の入れ替えがありました。親友を亡くした児玉兵曹は、その技量を認められてか、転勤はなく翔鶴に留まることとなりました。

この戦いまでに翔鶴の同期生の半分が散り、次は仇を打つ―と強い思いを胸に抱き、母艦修理期間中の訓練を過ごしたことでしょう。

新しく艦長となった有馬正文大佐は、福地運用長らに珊瑚海海戦の状況を詳しく聞き、航空母艦が戦時に弱点となる部分を克服するための修理も加えたそうです。武器の強化や燃え易いものは積まないことだけではなく、船の甲板に塗る塗料一つも燃え難いものに変更し、乗組員の火傷を防ぐためにと、半袖の防暑服を止めて長袖の作業服にするよう徹底しました。

昭和十七年八月十四日、修理が完了した翔鶴は日本を発ちました。

八月二十四日にはソロモン諸島北東海面の索敵に出ています。操縦山岸昌司一飛曹（乙飛六期）、偵察児玉兵曹、電信村上守司三飛曹（乙飛九期）です。翌二十五日も同方面を同ペアで索敵。

そして昭和十七年十月二十六日、南太平洋海戦を迎えます。

○四五〇　敵機動部隊発見
○五三〇　九七艦攻二〇機、零戦四機が発進
○六五三　攻撃隊が敵を発見
○七〇〇　攻撃開始

児玉兵曹は八月から同ペアで、四二小隊の二番機です。母艦を発艦後三番機は、空母ホーネットへの攻撃前にグラマンに捕捉され撃墜されてしまいます。

グラマンの攻撃を振り切り、小隊の二機はいよいよホーネットの輪形陣へと近づきました。

一番機の操縦員であった萩原兵曹の手記によれば、児玉兵曹の機長である山岸兵曹操縦の機体は、一番機よりも先行し果敢に攻める姿勢であったことが記されています。

山岸兵曹は中国大陸での戦いの後、内地で長く教員をされており、同期生たちの数々の戦果や戦死を耳にしてきたからこそ、この戦いに対して大いに士気が高かったことは想像に難くないことです。さらにずっと翔鶴に乗っていた児玉兵曹からの話も聞いていたでしょうし、仇を打つという強い思いは感じていたはずです。電信員の村上兵曹も真珠湾攻撃では赤城に乗っており、彼も壮絶な戦いを潜り抜けてきた歴戦の勇士でした。三人それぞれが強い心で臨んだことが伺えます。それが果敢に攻めようとする姿勢として操縦にでていたのでしょう。

空母ホーネットを捕捉した四二小隊の二機は雷撃を敢行します。まずは先行していた二番機山岸機、そのすぐ右後ろから一番機萩原機です。

魚雷投下後、二番機は取り舵で逃げているホーネット上空を右へと飛び去ろうとし、一番機はホーネットの右側をほぼ敵艦と同じ高さで飛行しました。魚雷投下後は機体が軽くなり浮いてしまうため、それをできる限り抑え低空で機体を水平に保ちながら逃げ切ることが重要です。

児玉兵曹の乗る二番機は若干高度が上がっていましたが、魚雷は二発ともホーネットにぶち当たり、雷撃隊として大成功の戦いぶりです。

しかし二番機は、少しだけ機体を傾けたとき被弾したのか、そのままホーネットに向けて体当たりするような動きを見せました。（もしくは被弾したために傾いたか？）ところが機体はそのまま海中へ。壮絶な戦死でした。

一番機の萩原兵曹は小隊として攻撃を成功させたものの、仲間二機とも目の前で失い、泣くに泣けない思いであったということです。

ホーネットには同時刻に瑞鶴飛行隊の艦爆が体当たりしていました。他数機の攻撃も含め、これらの攻撃によりホーネットは大破。

空母レキシントンを発見し見事に攻撃を成功させるという功績を残した岸田兵曹。

それに応えるかのように、空母ホーネットを撃沈させた児玉兵曹。見事に仇を打ったその偉

業に、友を想う心、絆を強く感じます。

昭和十八年十月、舞鶴で執り行われた海軍葬で、御子息の御遺骨を引き取りにきていた岸田兵曹の御父様は目を疑いました。息子の戦死の報せをくれた児玉兵曹の御遺骨が隣に並んでいたからです。きっと元気に生きて戦ってくれていると信じていました。

その後児玉兵曹の御兄様と会い、

「弟は南太平洋海戦で戦死しました」

という話を聞いて、体は強い電気に感電したようにこわばり、声も出なかったそうです。

戦争が終わり児玉兵曹の御兄様は、学校教育に心血を注ぎました。国を護り散った弟の分も、若い命を慈しむように。兵隊になることを望んだ弟の生き方も、若くして散ったことも、満足であったろうと信じました。

だからこそ御兄様は、人生をかけて若い人間たちを優しく見守ってこられたのだと思っています。

岸田兵曹の御両親は、自宅の庭にある青銅でできた二羽の鶴を大切になさいました。この鶴は岸田兵曹が幼いころから見続けてきた鶴です。戦時中、この鶴も軍に供出させられそうになったことがありました。町内会ではその鶴を供出するように求めたのです。

しかし御母様は、決してその青銅の鶴だけは、と拒否しました。

「こればかりは供出できません。強いてあなた方が供出せよとおっしゃるなら戦死した息子を返してくんなされ。私は何ものにも代えられない大事な息子を供出しています。」

町内会の人々は、無礼を謝り帰っていきました。

御両親にとってこの二羽の鶴は、まるで翔鶴と瑞鶴のようでした。そしてそれは大切な御子息の身代わりとして、いつまでもいつまでも御両親を慰めたのです。

お二人のことを書くにあたり、甲飛三期、磯貝常雄兵曹の御遺族様より多大なる御協力をいただきました。本当にありがとうございました。

磯貝兵曹は同じく偵察員でしたが、目の疾患で搭乗員として生きることが困難となり、航空兵器整備に転科され、昭和二〇年四月に比島で戦死されました。

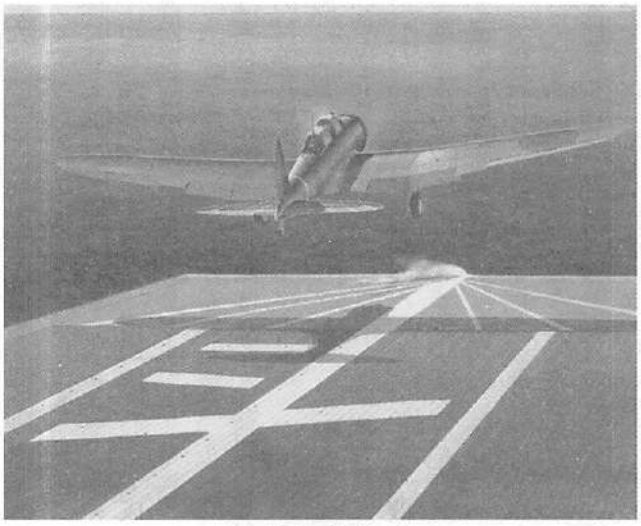
「ボーイズ・ビ・アキラメロ」と謳いつつ、転科したとしても『航空機』に拘り、最後まで戦い続けました。これが予科練で一番戦死率が高かった三期魂であったのかと、思わずにはいられません。

そして児玉兵曹を唯一知っていた御遺族様は、私が連絡をした半年前にお亡くなりになっており、いつも一足遅い私。それほどに時間が経過してしまったということなのでしょう…。

ですが、生きることも厳しい状況の中で必死に戦ってこられた彼らがいて、今の私たちの幸せがあり、自由に生きられるということを、これからも感謝して生きて参ります。

また児玉さんの故郷に会いにいきますからね。いつかは岸田さんの故郷へも。いつまでも大事な戦友の皆さんたちと笑っていてください。

おわり



九七艦攻

豫科練の戦争

久山　忍　著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑦

甲飛十四期　戸張　礼記

伝えたいこと

戦時中、我々は敵に勝とうとして頑張った。敗ければ祖国は滅ぶと信じ、勝てば豊かで平和な日本になると信じていた。戦うことが「平和を護る」ことだったのである。これが七〇年前までの日本人が持っていた平和への理念であった。

現代における「平和を護る」とはどういうことだろうか。平和という字は「和やかに」という意味である。平和を護るということは、戦争を止めて、皆で和やかに、お互いの生命を守りながら生きることを意味するのである。平和を乱す災難には天災と人災がある。天災は地震、津波、台風、雷、火山噴火などで人間の力では止められない。しかし戦争は人が起こすものだから止められるものなのである。しかも人間は誰しも平和を願っているのだから、戦争は必ず止められるはずなのだ。平和とは偶然によって得るものでも、天から与えられるものでもなく、みんなで守り育ててゆくものなのである。

戦争は最大の人災である。最悪の環境破壊でもある。戦争を止めなければ人類の未来はない。

だからこそ、今ある平和を大切に守り、より堅牢なものに育て、未来に引き継がなければならないのである。

戦死した予科練生の数は一万九〇〇〇人である。その数は予科練卒業生の八割にも達する。

ひとつの教育機関の卒業生の八〇パーセントが戦死したのである。こういった事実を知ること、語り継ぐことが大切なのである。

幾多もある戦争の悲劇のひとつとして、予科練の真実を後世に伝えることにより、戦争の歯止めのひとつになるのではないかと信じるからこそ、私は今こうして語っているのである。

私は、「人は何のために生きているのですか」という問いに対しては、「それは、生きるために生きるのだよ」と答えている。

人生は生命のたすきを肩にかけて走る駅伝ランナーである。生きて子孫を残し、次の世代のランナーに生命のたすきを渡す。だからこそ、次の世代にたすきを渡すために生きなければならない。

特攻で亡くなった先輩たちは笑って出撃していった。しかし本音は生きたかった。生きて結婚し、気特を押し殺し、愛する人たちの平和を護るために先輩たちは散って逝った。子供をつくり、子供の成長を見守りながら生涯を終えたかった。生きたい、死にたくない、という戦争によって多くの死者がでたことにより終戦となった。

終戦によって空襲はなくなった。日本を繋ぎ、日本は復興の道を歩み、現在を迎えた。

こう考えれば、我々はおびただしい戦死者のうえに立って平和と繁栄を築いたといえる。今を生きる我々は無数の死によって生かされたといえるのである。だからこそ、生かされている生命の尊さと平和の有難さに深く感謝の念を持って生きることが大切であろう。生かされている絆を大切にし、今ある自分の命を大切にし、夢をもって元気に生きよう。それこそが私たちに与えられた義務なのではないだろうか。

私が中学校の校長をしていたとき、郷土史クラブの生徒たちが予科練を研究テーマにとりあげ、私が生徒のインタビューを受けたことがあった。私は、予科練習生の猛訓練の経験を語り、予科練出身者の多くが激戦に散り、特攻隊員となって祖国のために命を捧げたことを話した。さらに戦争の虚しさ、悲惨さを語り、平和がいかに尊いものであるかを諄々と説き聞かせた。

私は、じっと聞き入る生徒たちの姿を見て、「ああ、このくらいの年で予科練に行ったのだなあ」と感慨深かった。そして、このような少年を戦場に送るようなことを絶対にしてはならないと改めて思った。

戦争ほど愚かな行為はない。互いに傷つけ殺し合うことの馬鹿馬鹿しさ、それが分かっていながら、いざ戦争が始まると人間は狂気し、動物の群れと化してしまう。

人間には知恵がある。偉大なる科学や文学あるいは芸術を生み出す頭脳がある。この大文明を造った賢い人間ならば、いかなる問題が生じても平和解決の道を見つけることができるはずだ。

しかし、現実は、戦禍のうずが今なお地球から消えていない

一日も早く、戦争がない世界を実現することを願い、そして未来永劫、この国に戦争が起こらないことを願いつつ、ここで筆を置くこととする。

軍歴（第一九連合練習航空隊）

翼を奪われ陸戦特攻隊へ

昭和一九年六月一日
海軍二等飛行兵を命ず
昭和一九年七月一日
海軍一等飛行兵を命ず
昭和一九年九月一日
海軍上等飛行兵を命ず
（操偵別分隊編成）
昭和一九年九月二六日
七九分隊八〇分隊は六五分隊一群二群となる。
（一群は操縦、二軍は偵察）
昭和一九年一二月一日
海軍飛行兵長を命ず
昭和二〇年三月二日
教育中止
昭和二〇年三月一五日
三沢空より大湊海兵団に転隊
二二分隊
昭和二〇年七月二五日
三沢空より大湊海兵団に転隊
昭和二〇年七月二八日
大湊海兵団より一群（一班から四班まで）は下北半島石持部落に駐屯
大湊第二特別陸戦隊第五大隊第二中隊と第三中隊
二群（五班より八班まで）は通信隊として大湊海兵団に勤務
昭和二〇年八月一五日終戦
昭和二〇年八月二八日
大湊海兵団より復員
昭和二〇年九月一日
任海軍二等飛行兵曹、
予備役に編入　了

さらば予科練②

乙飛十九期　山田　稔

私の班長（教員）列伝

デッキ（居住区・兵舎）にスチーム暖房、トイレは水洗便所という土空に昭和十七年十二月一日、十九期生として九五四名（なお同時に三重空へ一〇〇四名入隊帳簿上、実数計一八〇〇名この事を三重空へ転隊して初めて知りびっくりした）まさに雛鷲ならぬヒヨッコの誕生である。

私は五十八分隊六班、十九期のドンジリ、兵舎は第八兵舎の階下であった。

班長は歴戦の隅田教員、実に質実温厚であまり大声を出した覚えはない。折をみて昭和十二年の上海陸戦隊での話をしてくれた。

「まったく戦争に負けた国ほど惨めなものはないよ。戦争は絶対勝たなければいけないな」

それから三年余、原爆やソ連参戦の追い打ちをくらい、惨めにも満身灰にまみれた日本、隅田教員はその時どこの海で、地で敗戦の悲惨さを噛みしめていただろうか？。

入隊してまもなく、私たちは分刻みの予科練生活に振り回されることになるが、西も東もわからぬ子供（私は当時十四歳十ヶ月で入隊）または多少世間の味を知っているしたたかな若者を一人前の練習生に育て上げるのは容易な業ではなく、よほどの忍耐と温情が不可欠ではなかったか（そうでない人も中にはいたが）

班長との写真は十八年二月の水戸行軍弘道館前の梅をバックのものが、今も美しく残っている。もう一枚は第一学年修了式で分隊全員で撮ったもの、第二学年から私は操縦となり、五十三分隊（後七十三分隊、三重に移って十三分隊）となった為、班長とは心ならずともわかれたが、父は隅田教員に会い挨拶をしたと言う。これは家族との面会が許可になり、父が土空に来た時私に話をした。いつ、どこで挨拶したかは知らないが、そ

ういえば二つ三つ不審な点が班長に絡んで想いだされた。
一つは通信教育のことで、通信教員は目玉のギョロリとした仁王様さながらの、有名な近藤教員である。いつかキーを叩く私の近くに来て「不細工な手だな」と笑ったが私は母に似て手が大きく、いわゆる百姓手、「おおきに！ほっといてくれ」と思ったが、そのうち ほっとけないとんでもない事件に発展してしまった。
ある日の受信訓練の時、ウツカリして「ハッ」と思った時、四・五字受信しそこなった。
「これはいかん、今夜バッターの嵐だ」夜はたして呼び出しがきた。が、意外にもデッキではなく教員室だ。恐る恐る入ると目玉を充血した近藤教員が、「言い訳は閉かん、前ささえ」やがて前ささえに疲れた私が「クソツ」と思わず言うと「ほ、お前は反抗心旺盛だ」となおやられたが、バッターはなく放免された。これ等、隅田班長のお口添えの賜ではなかったか、鬼のような近藤教員も意外な面があり、ある外出日、
「今、お前たちの為、クラブを見つけといた。案内するから来い」と分隊員希望者を引率、隊門を出て左へ、舟島格納庫方面、今の大童・廻戸あたりか広々とした農家で、「どうだ、よいクラブだろう」と御満悦。
ところで、隅田班長の下宿も、霞空への途中の上り坂の右側で「霞台」この辺り二十年六月十日大空襲の被害を受けた。
（大空襲については、私も体験し九死に一生を得たので後目、書きたい）私たち班員、多分他の教員と二人で借りているらしく、それも珍しく和服姿で、その故か隊で見るより若々しく（実際に若かったのだろう）私達にカツ丼をおごってくれ、むさぼり食べる様わ呆れもせずニコニコ見守っていた。
その後操偵別で分隊が違ったが、ある日、元の班員の誰かが隅田教員が「山田はちっとも尋ねて来ないなあ」と言っていたぞと注進があったが、私は二学年になり普通学が本格的に始まり、それこそ夢中、水を得た魚の如く毎日が楽しく普通学の時間は予科練にいることをすっかり忘れてのめり込んでいたのである。
ちなみに私の一学年の唯一の楽しみは食事で、家は農家でもあり町から毎日のように箱を担いだ魚売りも来たりでそんなに貧しい食事ではなかったが、予科練のカレーは勿論バター臭いシチュー等の肉料理、烹炊所から流れる独特の匂いには辟易した。肉等年一度食べるかどうかだったのだ。入った当初「もやし」を見て「さすが予科練は大人数なのだな、芽が出た豆を食べさせる」と驚いたが本当に田舎では「もやし」等見た事がなく、家内にその話をすると笑ってそんな昔でなく、最近まで知らないおばあさんがいたとの事である。
週に一度、パンに紅茶、子供用に甘く料理した豆や南瓜、名前もわからぬ肉料理、そんなのが珍しく、月に一度は必ず出す、おばあちゃんへの手紙（なんと終戦前の七・八月も出した。私は所謂おばあちゃん子）そのおばあちゃんにも珍しいそれらを食べさせたくて、多分詳細をきわめたのだろう。ある日分隊士から「お前は食べ物のことしか手紙に書いてないな」と半分呆れてのお言葉を頂戴する始末であった。
普通学では何と言っても大好きなのは歴史（日本・東洋・世界）そして地理、国語等で、特に国語の教科書にあった、土井晩翠の「響りんりん」の詩や、高山樗牛の鳴立つ澤のほとりなるに始まる「思い出の記」等今でも暗唱できるほどである。これに引き換え、にが手なのは代数、物理等数学系で、幾何・三角はなんとかいけたが、全く関心がなく、数学の教官は十？期の先輩に私がソツクリとの理由だけで、出来ない私をやたら指名し、面白がっていた節さえあった。
話は前後するが、私は二学年に進級した六月一日、そして兵舎替え、新班長（二班）等も全く知らない。というのは五月末、ツベルクリン検査があり、陽性ということで数名が入室と

いうことになったからである。
私たちは早速軍医に会い
「この戦局下、一日も早くお役に立ちたいので訓練を休みたくない、すぐ出させて下さい」と座り込み、その後も再三にわたり軍医に迫ったが「まあ、まあ、すぐ良くなれば出すから」の説得に、数日病室暮らしを余儀なくされた。従って、皇太子さま（現、上皇）の土空訪問も、練兵場の天覧体操を病室の窓から拝見する始末である。
入室の方は間もなくウムヤムの裡に解除され、新兵舎に戻ったが、班長は前頭部のうすい（私と同じ）先任教員で、この人にはバッター三本貰った。
次第はこうである。
ある夜、衣嚢検査があり、袋から全部出して並べた物を調べていた彼は、私の洗濯物が黄色いと叫びバッターである。検査の目的は、金や本や食べ物等で不思議に何も見つからずその腹いせに私である。
この冬実は私は凍傷にかかり、病室で薬をつけて貰ったり、ホータイをしても毎日の作業でヌカに釘、両手にくづれた穴があき（今でもその跡が残っている）洗濯も捗めず、こすれば実に悲惨だった。その事を言おうと思ったが、近藤教員の時、「言い訳は聞かぬ！」と言われたので黙っていた。二年目は幸い慣れて、凍傷にもおさらばしたが前年は水の仕事の後よく手を拭かなかったからでその点タオルや手拭いを常に用意して、濡れた手をすぐ拭けば練習生の凍傷も随分防げたのではなかったろうか。
何故か二学年になったら班長の交代も繁く、この先教ともまもなく別れ続いて昔の力士朝潮に似た戦地帰りの班長も二ヶ月やはり歴戦の班長に変わった。班長は暇な時、シンガポール（昭南）のP屋の話等手放しで語ってくれた。ある秋の日、私はハンモックを釣り休んでいた。（予科練では病気一つしない私なので一寸した怪我か？）そこへ班長がブラリときて「お前は勉強したなあ、四・五十人飛び越して今度は〇〇番以内に入るぞ」と言った。これ即ち、普通上がれなかったであろう。普通学のお陰である。
普通学がなかったら私は到底浮かび浮かび上がれなかったであろう。
もっとも、正真正銘私一人の力ではない、こういうことがあった。ある試験の時のこと、時間内に私は全部書けたので鉛筆を置き、ホッとして姿勢を正していると、そばを通っていた教員が私の机の上を「コツコツ」と叩いてすぎた。「ハッ」として、もう一度答案を見ると、なんと一題違っていた。これ等教員の助力（カンニング）のお陰である。こうしたことはしばしばあったと言う。特に班の成績を上げよう等という時はなおさらで、当然対象は班員のみである。
二十年六月花の東京空を都落ちして霞空に来た時、土空を尋ねた同期生はこの私の班長が先任としていたという。
例によって薄情な私はその後、練習生を受け持ち、陸戦隊結成等多忙を極め（もっともらしい理屈をつけて）とうとう土空を尋ねることなく終戦となってしまった。世話になった人々へ恩返しもせず、この傾向はまだまだ続くのである。
近代的な土空に比べ、茫洋とした三重に十九年三月、甲・乙交換で転隊した私の班長は原口教員で開戦時、潜水艦でハワイ沖にいたとの事これも茫洋としてトッチャン然とした人で、奇しくも私と同県人（埼玉県大里郡男沼村・現熊谷市）であった。夏の休暇の時、私としては珍しく「いずれか実家に連絡があったら行きますから」と申し出ると、「いや、村からも来ているから」とのこと、この同村出身小平栗とは私は一面識もなく、戦後も不明、どんな人だったのだろうか？。
原口班長との縁は終戦後も続き、お亡くなりになるまで大変ご迷惑をかけ、お世話になった。十九年秋には（班長は真似目な若い鶴巻教員となる）その後ある時先任教員（一班長）が
「山田よ、お前の成績が〇〇番以内かどうか大変心配していたぞ」と話した。すると先教は何処で原口さんと会ったのだろうか。三重に出張で来たのだろう

か？明けて二十年正月、兵曹長に昇進されたと言って滋賀空で撮った写真を頂いた（今でも大事に取ってある）

三重空以来の長く御指導頂いた写真は・原口兵曹長

終戦後の秋、私は利根川べりの男沼村を尋ねた。班長も復員していて、奥さんは実家の方におられる由、相変わらず瓢々としていて「この辺の娘は働きもんだから嫁に貰え」等と言っていた。原口さんはその後実家を弟さんに譲り上京された。

その上京先を探し当て、バラック建ての目立つ東京の場末の班長宅を訪ね一泊した私も、家庭不和や、職業、果ては恋愛問題に悩んでいた。そんな私を苦しい中夫婦は暖かく迎えてくれた。班長はいずれか港湾関係の仕事をしているようで甲十三期生もいるよとも言っていた。

その後私も就職・結婚・育児と班長ともすっかり疎遠にすぎたが、同期生の内田君が品川に居られたので探して貰い、十五年後また縁を復活することができた。

いつか予科練の大会があった時、新潟の横川君を先頭にかっての班員数名、班長宅を訪問、一晩ザコ寝した懐かしい思い出がある。また、九州串良基地慰霊祭をかね二十四期の碑（翔空）除幕式に招待された時、羽田出発が早朝なので班長宅に一泊をお願いしたところ快諾され、お風呂、そして早朝、味噌汁、ご飯を作って頂き、無事大任を果たせた事、晩年は脳溢血の後遺症で半身やや不自由と見られたが元気で「芸者を裸にした」等とノロケ、柔らかいのか固いのか、終生判然としない原口班長わずかな予科練の絆がこんなにも長く続くとは？。

それに控え、私は何という恩知らずで、薄情な奴なのか。今に至って反省しきりだが、この雑文がせめてもの手向けとなってもらえば幸いと思う次第である。

三重空十三分隊四班長芝先教員はさしずめ他班の者だろうか、試験の時机をコツコツ叩く人である。十九年六月私の母が心臓発作で倒れ三日間の看護休暇で出発する時「お母さんにどんな事があっても帰って来いよ」とアドバイスしてくれた。情愛あふれ四班員の評価はどうか知らないが、心広く練習生を見守ってくれていたと思う。

次の詩歌は私が編集・ガリ印刷した「分隊卒業記念文集」に寄せたもので（他にも寄せる）その一旦を伺い知ることが出来よう。

雛鷲の歌　　芝先重光

一、俺は予科練飛行機乗りサ
七つ釦は伊達には着けぬ
明日は大空翼を連ね
七つの海に日の旗立てる
熱い血潮が萌えている

二、今は雛鷲しっぽはないが
夢に握った操縦桿
明日は見てくれ大空翔けて
皇国の光を世界に伸ばす

三、晴れの姿の飛行服
空を仰げば兄鷲達が
早く来いよと空戦訓練
明日は成りたやあの様な腕に

四、男度胸に命を捨てて
征くは一筋武士の道
俺は予科練飛行機乗りさ
ひと目見たなら優しいけれど
明日の戦場の雲にも聞けよ
敵の空母わ撃沈させて
砕けて散った花の名を

私の班長（教員）列伝後日談

雄翔一六八号で予科練入隊時の班長は隅田教員と書いたが、それらしき人物が辺見じゅん著「男たちの大和・上」に登場するのである。名前が一寸違うような気もするが、以下要約してみよう。

「おい三笠、三笠兵曹じゃないか」大和乗組の三笠兵曹が振り向くと、艦に横付けした駆逐艦

「島風」の甲板から、日焼けした顔が笑っている。「なんだお前か」声の主、隅田兵装とは横須賀砲術学校高等科練習生時代の無二のポン友で、外出はいつも一緒の仲であった。

「懐かしいなア島風に乗っとったんか」

「ああ、一ヶ月前にな、航空隊の教員からだ」彼は、常に急がず、慌てず騒がずの男だった。(この性格ぴったり)束の間の別れ、三笠は出港祝の酒に酔いながらも隅田との思い出に浸って再会を夢見ていた。然し、その願いも空しくレイテで船団護衛仲の「島風」は沈没し、隅田兵曹も還らぬ人となったのである。　合掌

無口、温和、正に兄貴のような二班長鶴巻教員については一寸省略させて頂き左記に若干記す。

鶴巻教員(班長)には感謝しきれない。陸上班でなく私を希望したからと無理に羽田を決定して頂いた。本当に只々申し訳ないの一言で、心より御礼を(遅ればせながら)申しあげたい。

ああ名曲「若鷲の歌」
歌手・霧島昇さんを悼む

昭和五十九年四月二十四日、歌手、霧島昇さんが亡くなられた。時あたかも、東京は今年の寒波のため、遅咲きの桜が花吹雪のように散っていた日であった。

生前の霧島さんに最後にお目にかかったのは(テレビではおなじみに拝見していたが)わが町に会館が出来、そのこけら落としの、確か昭和五十七年十一月十四日、あれが本当の最後のお別れになろうとは……。

やや、伸び上がるような、いつもの歌う仕草で(やや、痩せてはおられたものの元気で)それこそ永遠のヒット曲の数々を、とりわけ私の一番大好きで、それを聞くと、いつも熱い情熱が体いっぱい広がるような、あの「若鷲の歌」を鼻にかかった美声で歌って戴いたが……。

心からその華やかなご生涯と、あまりに早かったその死を、心から悼み、お悔やみ申し上げる次第である。

昭和十八年、あれも確か、初秋の夕方のような気がする。

「練習生総員集合、直ちに号令台前(第一練兵場)へ」のスピーカーで私たちは陸続と隊伍を組み、やがて「折り敷け!」の姿勢で何事ならんと台上を仰ぐと、そこには当直将校とアコーディオンを持った二〜三人の背広姿の人々。空は高く、霞ケ浦の水は、青々と縹渺と、まさに、世紀の名曲「若鷲の歌」誕生前の一瞬である。

ちょうど「決戦の大空へ」の映画が当隊おいて撮影中であった。練習生に扮した俳優や、多くの人の出入りの中で、私たちもエキストラとして数々の場面で出演したが、今日、その仕上げである映画主題歌を決めるため、作曲家の先生や歌手が来られたという。作詞西条八十、作曲古関裕而先生、しかも一曲は早くから決まり、二曲目は土浦へ向かう列車の中で倉皇のうちに出来たという。どちらを選ぶか!その決定は、この時、あの場所に集合した練習生の判断に全幅ゆだねられたのである。

「二曲続いて聞かせるから、良いと思った方に手を挙げよ」もちろん、一斉の挙手は、二曲目の、あの感動の名曲であった。

まさに、劇的な誕生!

作詞、作曲、選定と、あの当時の土空ならでは、予科練の雰囲気ならではの出現である。そして歌手はこれこそ日本一、霧島　昇!。

若鷲の歌

若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ飛ぶ霞ケ浦にゃ
でかい希望の雲が湧く

燃える元気な予科練の
腕は黒がね心は火玉
さっと巣立てば荒海越えて
征くぞ敵陣なぐりこみ

この歌のある限り、私は昭和十八年の土空をそして若い練習生たちを、空を、海を、そして激しかった慟哭のあの時代を。不朽の名歌手「霧島　昇」と共に忘れないであろう。　続く

天国へのメッセージ 第二回

最愛の重男さんの元に 旅立った貴女へ

「戦争の記憶は、次第に遠くへ去ってゆくが、死者は年をとらない。いつまで経ってもあの日のままの、別れたままの若さでいる人に対して、生きている者もまた、現世の年を忘れて、六十年前の若さで相対しているのです。」

そう言ってから二十年が経ちましたね。

重男さんには会えましたか？

顔が変わるほど流した涙も、悲しみも苦しみもすべて消えましたか？

あの日に帰った二人は、どんな話をしたのでしょうか。

私は、今も『少女のように微笑む、みよ子さん』を思い出します。

いつか、私が天国に行った時にまたお会いしましょう。

その時は、何を話したのか教えてくださいね。

行方　滋子

今の日本は 貴方が思い描いた 日本ですか

あなた方から見る今の日本はどう映っていますか？

あなた方が命を賭して戦ってくれたおかげで今日の日本は存在します。その日本はあなた方が望んだ日本になっているでしょうか？日本は今、平和です。

日本はとても豊かになりました。食べ物は豊富にあります。

暖かい家があり、冬に凍え死ぬ事はありません。日本に生まれた事に感謝します。今日の日本の平和があるのは、あなた方の文字通り命がけの献身のおかげです。今は私らがこの日本を守っています。

あなた方の愛国心や責任感、使命感といったものを見習ってはいますが、まだまだその域に達するには至っていません。

けど、今後もあなた方の功績を後世に伝えていきながら、国を守る者としての資質の涵養に努め、日本の平和を守っていきます。平和な日本をありがとう。

そしてこれからも見守っていてください。

土浦の防人

事務局を移転しました

海原会は約四十五年にわたり活動の拠点とした大森事務所を閉鎖し、令和三年十月二十二日、茨城県稲敷郡阿見町に移転をしました。

移転に先立ち、十月十四日には、海原会役員等十三名が大森事務所に集まり閉所式を行いました。式では、三十九年の長きにわたり、事務局職員として勤務していただいた岩崎絹子職員に対する感謝状の授与を行った他、コロナの影響で約二年間会えなかった役員が、一同に会し昼食をはさんで思い出話に花が咲きました。

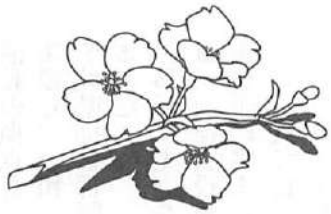
特に大森事務所開設当初から活動を継続してこられた予科練同窓の皆さんは、感慨もひとしおであったのではないでしょうか。異口同音に「時代のながれであることは仕方のないことだが、寂しいことです。」と感想を述べておられました。また副会長の甲飛十四期生太宰信明氏は、呼吸不全のため携帯用の酸素ボンベを携帯しての参加となりましたが、海原会の往時を懐かしそうに語っておられました。

住所　〒300-0301
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1
慎輝ビル3階
電話　029-886-5400
FAX　029-886-6400
JR常磐線土浦駅西口から関東鉄道
バス阿見中央公民館方面行乗車
「阿見自動車学校前」降車徒歩1分

今後海原会は予科練の聖地である雄翔園が所在する茨城県阿見町において、これまで以上に陸上自衛隊武器学校、阿見町、予科練平和記念館等との連携を強化するとともに、地元阿見町の皆様のご理解とご協力をいただきながら、活動の強化を図っていきたいとおもいます。

会員のみなさま方は、予科練戦没者慰霊祭や記念館見学に併せてどうぞ事務局を訪問していただけますようお願い致します。

会員の皆様には、予科練戦没者慰霊祭や記念館見学に併せて、どうぞ事務局を訪問して戴きますよう、お願いいたします。



三四三空隊史⑩

杉田上飛曹と私

笠井　智一（三〇一）

ギラギラと焼付くような太陽、油を流したようなアプラ湾を見下す大宮島（現グァム島）第一基地に、先ほど着陸したダグラス輸送機から、ゆっくりとした歩みでズングリ中背の顔に、火傷跡も生々しい見るからに精悍そうな下士官が玉井浅一司令の前に独得の挙手の礼で着任の挨拶をしている姿があった。

昭和十九年二月二十三日サイパンの空戦、さらに三月三十日ペリリュ島の空戦に、一航艦二六三空（別名豹戦闘機隊）はその主力搭乗員に潰滅的な打撃を受け、基幹員の不足から毎朝の上空哨戒にも事欠く昭和十九年四月中旬であった。

待機所の搭乗員に全員集合がかかった。玉井司令から「本日着任の杉田一飛曹だ」

台上の杉田兵曹は物静かな口調で「俺が杉田だ、何も云うことはないが遠慮せずについて来い」これが着任第一声であった。

待機所では色々と憶説が流れたが、過去の戦歴について誰一人知る者はなかった。一木利之先任下士官から聞かされたのは、彼はラバウル航空隊の歴戦の猛者で、火傷を負い大村空の教員から転勤して来たとのことであった。

もちろん彼が山本長官護衛戦闘機隊の一員であったことも、全く知らされもしなかったし知る由もなかった。その日私は杉田兵曹の三番機として編成が組まれ、戦死の日まで行動を共にすることになった。

その晩宿舎に帰るや否や早くも杉田一番機から「俺の愛する列機来い!!」

それ来た。はじめての戦地であり実戦の経験のない私は、またまた練習生時代と同じように戦地にきてまでバッターの洗礼を受けるのかと、一瞬胆をひやし、恐る恐る「笠井二飛曹参りました。」

夕食前の一刻、何処から持ってきたのか食卓に一升ビンがデーンとすえられ、すでに半分ぐらいへっていてかなり上機嫌の様子（この一升ビンはラバウル時代の上司であった玉井司令からもらってきたらしい）

「官等級氏名を名乗れ」「ハイッ、笠井二飛曹甲飛十期」「ヨーシ。」

早速酒盛がはじまった。杉田兵曹から見れば全くの子供扱である。この時何を聞いたか失念したが、「貴様達は戦闘機乗りとして戦地に来たからには、酒ぐらい飲めなくてはグラマンと空戦は出来んぞ」と、さあ飲め飲めとドンブリ茶碗である。またたく間に一升ペロリ。おいちょっと待っとれ、といってよろめく足で何処かへ。しばらくすると遠くから歌がきこえてきた。

ソロモン群島やガダルカナルへ
今日も空襲大編隊
翼の二十粍雄叫びあげりゃ
墜ちるグラマン、シコルスキー

何処から持ってきたのか、一升ビンを肩にかつぎ細い目をさらに細くして得意満面。酒色共に旺盛な、静かな豪傑肌の人であった。比島二〇一空時代から菅野大尉の心酔者の一人でもあった。マバラカットでのある日、連日の特攻攻撃に戦友達は次々に戦死、杉田兵曹は何か思いつめた様子で、「笠井拳銃を持って俺と一緒に来い。」

「日光はどうした」「ハッ、日光は今マラリアの発作で兵舎です。」「うんそうか、やむを得ん」

二人は拳銃片手にマバラカット飛行場の横を流れるバンバン川の土手を下りた、葦の生い茂った川床の粗末な指揮所へ。「副長、ぜひ特攻に征かせてください。」副長は一瞬「何特攻？馬鹿なことを……。特攻は何時でもいける。それよりお前達は内地に帰えり、戦死した戦友達の墓参りを俺の代りにしてこい。それがわしの頼みじゃ。たのむぞ」と、独特の静かにさとすような口調でいわれた。杉田兵曹は返えす言葉もなく引きさがざるを得なかった。

これが十一月の初旬であっただろうか。間もなく内地転勤の命令が出たのであるが、何時何処で別れたのか、二十年一月松山で再会することが出来てたがいの無事を喜びあったのである。

いよいよ三〇一飛行隊の区隊編成で杉田兵曹は菅野隊長区隊の第二編隊の一番機として、私はその二番機として行動を共にすることになった。前にも述べたが、彼は菅野隊長の絶対崇拝者であり、誰からもこよなく愛され頼られ、実戦を生かしたよき助言者でもあった。

また、『杉さん』の愛称で親しまれていた。飛行作業が終わって兵舎に帰えると必ず「愛する列機来い」とお呼びがかかる。今日の訓練の注意かと思えばさにあらず。当時流行の疥癬（皮膚病）の掻き方と肩揉である。訓練飛行ではいきなり編隊離陸と編隊宙返りである。必死になってついていったことを覚えている。

厚巻きはひねり込みの操作である。なにかにつけてきびしかった。特に編隊について格別のきびしさがあった。紫電隊なので紫色のマフラーを作ってはとの発案で、早速作ることになったが、当時はマフラーにするような布地もなく困っていたところ、隊長以下三〇一飛行隊の連中がお世話になっていた大西琴子さん（現姓今井）が、それでは何とかしましょうとのことで二十数名分の布地を紫色に染めてくださった。

このマフラーに杉田兵曹の好みの合言葉「ニッコリ笑えば必ず墜とす」を地元女学校の生徒さんに刺繍をしていただき、杉田兵曹はこのマフラーとともに鹿屋の空に散ったのであった。私は今もその紫色のマフラーを、杉田兵曹の思い出とともに生涯心の支えとして、刺繍した生徒さんの名前とともに保存している。

三月十九日杉田兵曹は、列機と共に三機撃墜の武勲をたてたのであるが、私は下痢のため戦闘に参加出来ず今もって一生の不覚であったと残念でならない。

その後鹿屋に転進が決定されたある日、彼の行きつけの「のんべい」という一杯のみ屋が道後松が枝町の坂を下った突当りにあった。ここのおやじさんに格別可愛いがられていて、下宿も近かったのでよく飲みに連れて行ってもらった。

戦死の時着用していた皮手袋を遺品として田村君が下宿に届け、御遺族の手に渡ったことを聞いた。鹿屋転進後は主に喜界島の上空制圧に参加したが、いよいよ四月十五日運命の日が訪れたのである。

この日ここ鹿屋基地では桜の花もすっかり散り果て若葉が美しかった。この日私は何とはなしに気の重い朝を迎えた。

指揮所にはZ旗があがり、搭乗割は一番機杉田上飛曹、二番機笠井上飛曹、三番機宮沢二飛曹、四番機田村飛長の編制で、朝から即時待機別法で待機していた。「敵編隊鹿屋に向って北上中」の情報が入り、直ちにエンジン始動試運転もそこそこに一、三番機が猛然と砂ぼこりをあげ、杉田兵曹は後ろをふり返えり上空を指しながら、離陸をはじめた。その時七～八機のグラマンが銃撃をしながら急降下して来た。もちろん離陸機に向ってである。私はハッ！！と思った。私も直ちに離陸すべくチョーク（車輪止）を外す合図をしたとたん、ロケット弾（小さなロケット弾を翼下に搭載していた）が炸裂し翼に大穴。もうこれまでと機外に飛び出そうとふと離陸していった方向に目をやった。アッ！！　そこに信じられない光景が……。グラマンの一撃で杉田機は、グラッとかたむき黒煙とともに飛行場の端に突込むのが目に入った。「杉田兵曹」私は声にならない大声をあげた。

思えばソロモン、ガダルで日本の若きエースとして戦い、山本司令長官の護衛についた六機の戦闘機で勇名をはせたあの杉田兵曹の何ともあっけない最後であった。

私は昭和十九年四月以来、常に列機として数々の戦闘に助けられてきたが自分の手柄話は全く口にすることなく、部下を見守りただひたすらに撃ちてし止まん、「ニッコリ笑えば必ず墜

とす」の言葉通りの気魄で、長官戦死の責任を負うために死場所を待っていたのではないだろうか、と思われてならない。あの細いやさしい目で今にも「おい愛する列機来い」と呼びそうな気がするのである。

昭和五十二年七月二十三日、三四三空の慰霊祭が靖国の御社で源田司令以下多数のご遺族と生存者が参列してしめやかに挙行された。司令の切々として情熱あふれる慰霊の言葉の中にも、杉田兵曹の武勲を称える言葉があり、感動その極みに達したのであった。この席では杉田兵曹のご遺族にお目にかかれなかった。何故？　早速志賀飛行長に尋ねたところ、どうしても連絡がとれなくて県に問い合わせたところ大阪方面に転居されたらしいので是非さがしてほしいとのことで、早速豊中市庄内の目指す番地を尋ねた。八月十四日であった。私は明日はお盆だ、杉田兵曹は必ず会わせてくれるだろうと確信をもって歩いた。午後三時頃さがし当てることが出来た。

御母堂は大変元気だったが、庄一は内地で戦死したのに遺骨がないのはどうしたことだろうか。私は今となって遺骨についてはあきらめているが、せめて元気な間に庄一の戦死した地を是非訪れたいのが念願であると、聞かされた。その旨源田司令に連絡、相生副長、志賀飛行長の一方ならぬ御尽力によって慰霊訪問が実現した。

御母堂は、庄一が七月一日に生まれたので是非その日に慰霊したいとのことで、昭和五十三年七月一日、御母堂と弟君二人に私の四人が旧鹿屋基地（現海上自衛隊基地）を訪れた。基地では司令官はじめ隊員の方々から身に余るほどの御世話になり、基地内戦死の地で香華を手向けささやかな慰霊祭をしたのであった。御母堂は非常に喜こばれ、これで私は思い残すことはないとしみじみ語られ、関係各位のご厚意に感謝しておられた。私も、杉田兵曹に受けた御恩の万分の一でも御恩返しをしたいという、戦後ずっと思いつづけてきた念願がようやくにしてかなえられた思いで、いくらかほっとしたのであった。

四月十五日同じ日に戦死した三番機宮沢豊美二飛曹の霊が、土地有志の方々の手で手厚く葬られていることを聞きそこをたずねた。鹿屋市星塚町国立療養所敬愛園北側の松林の一角に墓地があり、真光寺平川住職はじめ地元の方々が戦後三十余年の今も、美しく掃除のゆきとどいたところに碑が建てられ、当日平川住職はじめ地元の十数名の方々と杉田御遺族と共に読経慰霊をしたのである。墓碑に「故宮沢兵曹は特攻隊として昭和二十年四月十五日鹿屋基地を発進途中戦闘機と遭遇激烈な空中戦を展開敵機……力つき……名誉の戦死をとぐ」とあり法名「釈真敬之墓」とある。

私はこの一文を三四三空剣部隊隊誌にとどめ、後世にその偉勲を伝え、在りし日の若き戦士はかくありたりとその名を刻み、御霊安かれと祈るものである。

次号に続く

ニッコリ笑えば必ず墜す

田村　恒春（三〇一）

昭和十九年十二月上旬、館山基地の第二五二空戦闘三一五（司令八木中佐）から四国の松山基地に転勤を命ぜられ、桐山兵曹とともにダグラスC三にて松山基地へ飛ぶ。

松山基地では、大坪、原田の両君、同期（特乙一期）の仲である伊沢、笹本、深山、桜井の諸兄（私より一足先に横空にて紫電、紫電改の搭乗訓練を受けていた）が元気な顔で迎えてくれた記憶あり。

当時松山基地には第六〇一空の艦攻隊（天山）が訓練しており、他にドイツ製ユングマン二機があり、大坪、原田兵曹からユングマンに乗ったと聞かされました。

以上が松山基地着任時の記憶です。

十二月中旬下旬紫電、紫電改の説明書により勉強。地上滑走

を行い、その後佐藤兵曹に編隊訓練を受け、二機にて編隊宙返りを行ったことが今でもハッキリ記憶に残っており、私が始めて紫電改に乗った日でした。

昭和二十年一月、続々と比島各地からベテランパイロットが着任。正月元旦の琴平参り後、着陸時の飯田兵曹の事故。

惜しい人を失った思い。その後は訓練、編隊空戦の講義、ベテランパイロットの実戦の体験談などで過ぎる。

二月中――紫電改の数も大分増える。紫電改による特殊飛行、編隊訓練で中旬になる。

いよいよ三〇一飛行隊の区隊編成が発表され、私は驚きました。私はラバウル、パラオ、比島で活躍され、連合艦隊司令長官山本五十六大将の護衛を務めた撃墜王の杉田庄一兵曹の区隊、菅野小隊第二区隊の四番機に選ばれ、二番機にはパラオ、比島で活躍した笠井上飛曹、若年搭乗員の私が先輩搭乗員が多くいるのにどうしてと暫らく信じられない気持で一杯でした。

同期の仲が堀区隊（現三上さん）の四番機、伊沢が橋本区隊の四番機に選ばれその責任の重大さを感じました。

二月下旬から三月上旬――区隊編成が決まってからの杉田区隊の訓練は実戦以上のもので、二対二の編隊空戦訓練から始まり、急上昇、垂直旋回、急降下、宙返りと、私は笠井兵曹に離れぬよう早め早めにスロットルを操作しても時々離れ、地上で見ていたS少尉にお叱りを受けたが、杉田兵曹、笠井兵曹は何も云わずに指導してくれました。

編隊訓練時スピード計をよく見ましたが、常時三百節から三百四十節くらいを指しており、耳鳴りがし翼端から飛行雲が出ているのが常でした。

二機対二機、四機対四機、八機対八機、十六機対十六機の編隊空戦も会得し、二十四機の編隊離陸も出来るようになった三月十日頃、敵の大機動部隊出現の報に警戒態勢、地上待機に入ったと思います。

三月十八日、敵機動部隊発見の報に稼動機全機飛び上がるも敵機を見ず全機帰投す。

兄弟のような杉田区隊の搭乗割。一番機ベテラン杉田上飛曹、二番機笠井智一上飛曹、三番機宮沢豊美二飛曹、四番機田村恒春飛長（杉田区隊の「ニッコリ笑えば必ず墜す」の紫のマフラーを全員巻いて）

三月十九日。搭乗員起しと共に飛行服に身を固め杉田区隊の『ニッコリ笑えば必ず墜す』の紫のマフラーを襟元に締め、隊舎を出ると、暗い中轟々とエンジンの試運転の爆音が聞えてくる。

整備員の方々の御苦労に感謝しながら飛行場に走る。搭乗員全員集合がかかり、源田司令の訓示。続いて志賀飛行長の敵情報告があり、我が三〇一飛行隊は剛勇菅野隊長の指示、注意を受け機上待機のため海岸線に列線を引いた、搭乗機に向う。私の搭乗機は「A―一三」号機であった。

本日の搭乗割は一番機ベテラン杉田庄一上飛曹、二番機横島敏上飛曹、三番機宮沢豊美二飛曹、四番機田村恒春飛長でした。何時もは二番機に、私が信頼し親しみをもっている次兄のような笠井智一上飛曹なのにと、残念だと思う気持を胸に機に乗り込む。

発進態勢をとり機上待機する。十分ぐらいたった頃突然レシーバーに英語がペラペラ入ってくる。水晶発振器を盗まれたのか、周波数が同じなのに驚くと共に、敵さん来たなあコンチキショウと気合が入る。数分後全機発進の命令が飛び込んでくる。

早くも七〇一飛行隊が離陸開始。続いて四〇七飛行隊、我が三〇一飛行隊が最後である。

もうもうと上る砂煙りの中離陸位置に着くと同時に、菅野隊長を先頭に杉田区隊、柴田区隊が一斉にスロットルレバーを入れ、一糸乱れぬ編隊離陸を敢行する。

脚を収めながら今日こそは大空で死ぬんだと決意する。（三〇一飛行隊の機数は五区隊から六区隊二十数機と記憶する。）

編隊は海に向って飛び上がりそのまま高度をグングンとって行く。ベテラン一番機杉田上飛曹が時々列機を振り返ってくれる。

心強い思い。高度七百米―八百米くらいで右旋回しながらさらに高度をとって行く。

間もなく高度三千米くらいになった頃、菅野隊長の敵大編隊発見の落着いた声がレシーバーに入る。

隊長機を見ると敵機の方向に機首を向けバンクを振り、二十粍の試射をしながら敵機の位置を知らせてくれる。

まだ敵機影は小さい。我が一番機杉田兵曹が手信号で「カウルフラップ」全開、「OPL点灯」、空戦「フラップ」切替え、二十粍の試射を指示してくれる。

四機一斉にスロットルの発射レバーを握る。銃口覆の布を破って弾丸がダダーと飛び出す。

続く

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略)(単位千円)

令和三年九月十六日より

五　仲居　照栄(乙20)千葉
一〇　豊田重次郎(乙22)福岡
五　遠藤　五六(乙20)福島
五　清水香代子(一般)愛
　酒井　陽太(一般)東京
五　岡本　正人(乙22)埼玉
五　萩谷　元男(乙9)茨城
三　加賀谷有里(一般)茨城
五　青木邦三郎(甲14)栃木
五　三浦　昇(乙21)三重
五　池田　守(一般)千葉
五　都築　倍彬(甲13)大阪
一　伊勢川嘉也(甲16)和歌山
五　井上　萬二(乙23)佐賀
五　久保田健一(乙13)宮崎
五　岩澤　末三(甲14)東京
五　太田　誠二(乙11)滋賀

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

九月

二日
事務局粗大ごみの回収
於　事務局
回収業者により、事務局内の粗大ごみを廃棄した。

十六日
NTT工事
於　新事務所
新事務所にWi-Fi環境を整備するためにNTTが工事を行った。平野事務局長が立ち合い

二十三日
新事務所改装工事
於　新事務所
新事務所の改装工事を実施した。平野事務局長が立ち合い。

二十六日
筑波海軍航空隊慰霊祭
於　筑波海軍航空隊記念館
平野理事及び行方参与が出席した。

十月

二日
海原会所蔵品庫内の整備
於　所蔵品庫
湯原霞ヶ浦支部長、行方副支部長、平野理事が参加して、所蔵品庫の整理を実施

十四日
事務所閉所式挙行
於　事務局
参加者
太宰副会長、菅野理事長、安井副理事長、平野、篠田、湯原、山下、星指の各理事、豊岡監事、津島評議員、池及び六車顧問、行方参与

後藤行政書士来所
於　事務局
法人登記変更申請手続き

二十一日
金庫及複写機の搬出
於　事務局
引っ越しに先だち重量物及び精密機器の搬出を実施

二十二日
事務所引っ越し作業
於　事務所&新事務所
搬出作業
　安井副理事長、平野理事が立ち合い
搬入作業
　酒井副理事長、篠田、湯原、山下、平野の各理事及び原会員が支援

二十八日
阿見町重要文化財指定協議会出席
於　阿見町中央公民館
平野事務局長が、オブザーバーとして出席

「予科練」第468号1・2月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1回1日発行）
令和4年1月1日発行
発行人　菅野寛也
編集人　保坂俊雄
発行所〒300-0301
公益財団法人　海原会
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1（慎輝ビル3階）
郵便振替　00140-9-54332
☎00-2986-8866
FAX00-2986-8866
定価500円

海原会会員の皆様へ

大切な人と寄り添うお葬式
家族葬のことが知りたい

お葬式のご依頼や「もしものとき」に備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談・見積無料

お客様満足度 99%※
※当社施行客アンケート調べ

自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、ご希望に合わせたお葬式プランがございます。

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓
お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。
墓所工事
標準価格（10万円以上）の10%割引
サービス提供エリア：関東・関西・東海
「お墓のお引越しガイド&事例集」
無料で資料を差し上げます。

お葬式
葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。
葬儀
祭壇標準価格の20%割引
※一部斎場、一部商品は除く。新花で送る家族葬は優待料金
サービス提供エリア：関東
「お葬式の流れがわかる100項目」
無料で資料を差し上げます。

お仏壇
仏壇店は首都圏に2店舗（国分寺・千葉）。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。
仏壇
店頭価格の25%割引
※ただし、催事特価品と仏具小物、手元供養商品は対象外
サービス提供エリア：関東
「お仏壇カタログ」「特選 お位牌」
無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは海原会事務局へ 03-3768-3351
お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO MEMORIAL ART OHNOYA
メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp